
ドラド～夢の黄金

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラド〜夢の黄金

【Nコード】

N8646I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

アマゾンまでドラドという魚を釣りに行った僕だが、とうとうその顔を拝むことは出来なかった。僕は釣り上げたトクナレとスルピンを女性ガイドのニナにプレゼントした。彼女は僕にお礼がしたいと言っ。

金色の魚体が跳ねた。針を外そうと、必死にジャンプを繰り返す。
「トクナレかあ！」

僕は金色の魚体を見た瞬間、ドラドかと思っただが、ジャンプした魚を見て失望した。

ニナは「あれだって立派なゲームフィッシュよ。それに美味しいし」と言いながら、僕の竿を眺めている。竿は満月のようにになっている。

トクナレはルアー（疑似餌）に付いた三本針を外そうと必死にもがいている。僕は強引にそれを引き寄せた。今回の釣行で何匹のトクナレを釣っただろうか。取り込む時にトクナレの下顎を掴むので、僕の親指はザラザラだった。トクナレには鑿のような歯が付いている。だから、指の皮が剥けるのだ。

もうすぐ納竿の時間が迫っている。僕はドラドを少し甘く見ていたようだ。

「熱帯魚屋で売られている魚なんて、簡単に釣れるだろう」

そう思った僕の考えは、どうやら間違っていたようだ。この三日間で、僕はドラドの顔を拝めていない。僕のルアーにたまに食いつく魚は、スルピンというナマズか、このトクナレであった。トクナレはピーコックバスとも呼ばれ、日本で悪名高きブラックバスの親戚である。

それでも僕はルアーを投げ続けた。濁った水面はその下にどんな魚を蓄えているのかわからない。でも、ニナは「ここがドラドのポイント」だと言う。今はニナの言葉を信じるしかなかった。

夕焼けが迫っていた。熱帯のジャングルに沈む夕日は日本のそれとは違う。不純物のない神秘的なピンクに染まっている。僕はアマゾンの大自然の懐の深さを実感しながら、ルアーを投げ続けた。

「ヒット！」

だが、その引きは下に潜るようなそれで、ドラドではないことが一瞬にしてわかった。おそらくスルピンだろう。思ったとおり、呆気なく上がってきた魚はスルピンだった。二ナがスルピンを網で掬ってくれた。

夕焼けのピンクの色は紅に変わり、宵闇がすぐそこまで来ていることを物語っていた。

「もう、時間よ」

二ナが虚しそうに呟いた。僕は竿とリールを恨めしそうに見つめた。

僕はサンパウロで買った缶ビールのプルトップを、プシュと開けると、一気に飲み干した。

「ドラドが釣れなくて残念だったわね」

二ナが僕の前に座って呟く。僕は二ナにも缶ビールを勧めた。買っていた缶ビールは沢山余っている。今夜はこれをすべて空けてしまおう。

「ありがとう。ビールなんて、普段は飲めないの」

そう言いながら、二ナはさも美味そうにビールを啜った。

僕は壁に立て掛けてある竿に目をやる。今は亡き父から譲り受けた傷だらけのリール、アブのアンバサダー6000Cが妙に寂れて見える。

「はぁー……」

自然とため息がこぼれた。

僕は今、秘境アマゾンのジャングルの縁の部落に身を寄せている。全身黄金色のサケそっくりの魚、ドラドを釣るために、遙々日本から来たのだ。そもそもドラドとは黄金という意味で、かの秘境、エルドラドを髣髴させる。

その魚を初めて見たのは、開高健氏の名著「オーパ！」であった。もともとサケ・マスの類いを釣るのに興味があった僕は、いつかア

マゾンでドラドを釣ってやろうと思っていたのだ。断っておくが、ドラドはサケ科の魚ではない。カラシン科という、どちらかというところピラニアに近い魚である。

しかしアマゾンに来たものの、ドラドはそう簡単に釣れる魚ではなかったのである。

二ナは僕が雇ったガイドだ。女性ながらにして、近辺の地理や魚に詳しく、頼もしいガイドだった。本当は二ナの夫にガイドを依頼するはずだったのだが、夫は出稼ぎに出ていて不在だった。

僕は時折釣れるトクナレやスルビンという魚を、二ナにプレゼントした。三十歳を前にして、七人も子供がいる二ナの家族にとつて、これらの魚は貴重なタンパク源のようだ。実際、夕食のメインディッシュも僕が釣った魚の蒸し焼きだった。これがどれも意外に美味い。それがせめてもの救いだっただろうか。

トクナレは開高氏にして「ブラックバスよりはるかに華麗なアマゾンのブラックバス」と言わしめた名魚で、その釣り味は最高だった。一方、スルビンはナマズの一種で、鮮やかな黄色や青のその魚体は、さすが南米だと唸らせられる。しかしやはり外道（本命以外の魚）は外道に過ぎない。

僕としてはドラドをどうしても釣り上げたかった。明日の朝には、僕はこの地を去らなければならぬのだ。そして僕のような庶民が、一生のうちに何度もアマゾンくんだりまで、来られるはずもない。もしかしたら、これが最初にして最後のアマゾン釣行になるかもしれない。そう思うと、悔いの残る釣行だった。

「気を落とさないで。最近、ドラドは昔に比べて数が減っているのよ。フラツと来て、三日で釣り上げたとしたら、奇跡に近いわ。今度、また来てね」

二ナが優しく僕を慰めてくれるが、少し呂律が回っていない。僕は二ナの顔を見た。彫が深く、大きな瞳。異国の美女は普段飲み慣れない缶ビールで、酔いが回ってしまったようだ。

「ありがとう、二ナ。だけでももう今度は、ないかもしれないんだよ」
僕その言葉に、粗末なテーブルの向かい側にいた二ナが、スツ
と立ち上がった。そして僕の横へ座る。化粧も香水もつけていない、
本来の人間の女の匂いが僕の鼻をくすぐる。

「あなたには、いろいろプレゼントを貰ったわね。お礼をしなくち
や……」

そう言うと、二ナは僕のズボンの股間を撫でた。

「い、いいよ。旦那さんに悪いよ……」

しかし二ナの瞳は妖艶な色を湛えていた。そして僕に全体重を預
けながら呟いたのである。

「子供たちも、もう寝たわ。私たちアマゾンの女にはね、古来から
脈々と繋がるアマゾネスの血が流れているのよ」

僕の脳裏に二ナに襲われるイメージが広がる。しかしこの時、僕
の下半身は不埒な妄想に熱くたぎっていたのだ。

二ナは純粋なアマゾネスの子孫ではないであろう。おそらくは白
人の血も混っていると思われる。しかしこの際、そんなことはどう
でもよいことであつた。

異国の女を抱くのはこれが初めてであつた。いや、「抱く」という
より、僕が「抱かれている」とか「襲われている」と表現した方が
適切かもしれない。

フローリングとは呼べない、粗末な板張りの床で二ナと僕はもつ
れ合つた。床の下からは水の流れる音が聞こえる。二ナの家は川の
上に建てられていた。日本から来た僕が見れば、あばら家と言つた
ところだが、それでも他の家よりかは豪華なのだとか。

アマゾネスの末裔は早くも、麻のワンピースを脱ぎ捨て、全裸に
なっている。僕はと言えば、ズボンとパンツのみ脱ぎ、二ナの下で
いいように弄ばれている。

アマゾネスの血を引く女性にとって、前戯などそれほど重要なこ
とではないのかもしれない。大事なのは肉体の交わりだと、僕は推

測する。

僕の脳裏に一瞬、「不倫」という言葉が浮かぶが、アマゾネスの猛攻はそんな概念を超越していた。それは生命の営みを謳歌する、崇高な行為に思えたものである。

「アア、オオ……」

僕の上に乗った二ナの口から、喘ぎ声が漏れる。女性の喘ぎ声とは、甘いものばかりだと思っていたが、二ナの声は生命を欲し、我が物にせんとするような、ダイナミックな声だった。

そつだ。動きも猛々しかった。腰を前後上下に振りながら、乱れるように、豊かな肢体が僕の上で舞う。

思えば、二ナを初めて見てから、そのどこか男好きのする顔と、豊かな肢体に心惹かれていたのだと思う。ドラドの代償として二ナの肉体を得たことは、思いもかけない幸運と言わねばなるまい。

そんな交わりだからこそ、僕は己の身体機能に抵抗し、至福の間が少しでも長く続くように試みる。

だが始まりがあれば、必ず終わりがあるものだ。僕の背中に寒気のような快樂が走った時、偉大なるアマゾネスは、僕の生命の糧を搾り取っていった。

僕はこの時、夜の大アマゾンに自分が溶けていくような錯覚に襲われた。

翌朝、僕はテケテケ（小型飛行機）の飛行場まで二ナに送ってもらった。

悪路を整備の悪いジープが走る。シートベルトをしても、身体が10センチは浮きそうだった。

「よくこの景色を見ておくといいわ」

二ナが僕に言った。僕は大自然のジャングルを脳裏に焼き付けると同時に、振動する二ナの横顔を眺めた。

「この近くまで森林の伐採が進んでいるの。昔は自給自足で生活できたけど……。私たちも暮らしていくためには、仕方がないのよ。」

あなたから貰ったガイド料で私たち一家は半年も暮らせるの」

そう語る、正面を見据えながらハンドルを握る二ナの横顔は、どこか寂しげだった。ガイド料が入って嬉しい反面、文明に頼り、この大自然が壊されていくことに懸念を覚えているのかもしれない。

「もし、僕がまたここに来る機会があったとしたら、その時までドラドはいるかな？」

「そう簡単に滅びはしないと思うけど……。ただ、数が減っているのは確実よ。それを減らしてるのは私たちかもね」

突然、視界が開けた。ジャングルの木々はなぎ倒され、ブルドーザーがせっせと稼働している。来る時には通らなかつた道だ。二ナは僕にアマゾンの現状を見せつけるために、わざわざこの道を通つたのだろうか。

「畑にするのよ。だいぶ奥地まで伐採は進んでいるわ。もう、この辺りも秘境とは呼べなくなつたわね」

僕は知っている。一度失われた自然を取り戻すするには、気が遠くなる程の長い年月がかかる。自然という黄金は今、失われつつあった。その現状を目の当たりにし、僕はドラドへの思いを馳せる。この目でドラドの生存を、アマゾンの行く末を見届けたかった。僕にとって大アマゾン永遠に夢の黄金であつて欲しかった。

「また、必ず来るよ。その時、また君にガイドを頼みたいな」

「あなたなら、喜んで引き受けるわ」

二ナは少し寂しげな微笑みを浮かべながら、ハンドルを切つた。

(了)

(後書き)

おそろくドラドの棲む地域には、トクナレはいないと思われ
ます。あくまでフィクションなので……、悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646i/>

ドラド～夢の黄金

2010年10月8日15時37分発行